

6 富本錢について

井戸 SE1555 から出土した新種の銅錢「富本」は、すでに述べたように、井戸の底面近くから和同開珎 8 点、萬年通寶 1 点、神功開寶 2 点とともに出土したものである。出土状態などから、この錢が奈良時代の銅錢であることに疑いの余地はない。

「富本」銭はまた左京一条三坊の東三坊大路東側溝 SD650 にも出土例がある。¹⁾これは、1969 年に和同開珎から延喜通寶にいたる 11 種 725 点にのぼる皇朝錢とともに出土したが、腐蝕が進み銭文が不鮮明なため、銭種不明銭として扱っていた銭である。今回は「富本」銭との比較により、同種の銭であることを確認した (Fig. 92)。SD650 は、8 世紀初頭に開削され 10 世紀初頭まで機能した溝で、「富本」は 9 世紀を下限とするこの溝の下層から出土した。

このように今回発見の「富本」は、平城京における 2 例目の出土であり、その鋳造時期は SE1555 の廃絶した奈良時代末以前に求めることができる。

いっぽう、古泉界には数種の富本銭が伝存しており、江戸時代に盛行した絵銭の一種とみるのが通説になっている。絵銭は祝賀、賞賜、戯玩、装飾、護符、記念など多岐にわたる目的で鋳造した通貨以外の銭で、多くの場合、吉祥句や様々な図柄で飾り、種類は 2000 種以上に及ぶといわれる。絵銭の起源については、足利義政の六条銭を嚆矢とする説、寛永錢座開設時の祝賀銭を始まりとする説、寛文 10 年 (1670) の古銭使用禁止令を契機とする説などがあるが、元禄年間以降に盛行したというのが通説である。²⁾以上のように今回の発見による知見と古泉界の通説との間には、実に 900 年近い齟齬が生じる。これをどのように考えるべきであろうか。

そこで、古銭界に伝存する富本銭を図譜類から抽出し比較してみると、Fig. 92 のように大きく 2 種に分類することができる。³⁾挿図上段に示した 4 点の銭は、今回の出土品とは明らかに型式を異にする一群である。方孔が円孔に変化し背面に上り藤を配した 1、七曜文が梅鉢文で表現された 3・4、また富の字体を異にする 2 など、変化に富み絵銭特有の新しい要素がみられる。これに対して、今回出土と型式的に類似するのが、中段に示した 4 点である。実物での比較ができないため、今回出土銭と同範かどうかは断じ難いが、銭文、銭容ともに良く似た一群の銭といえる。この種の「富本」は上段の銭に比べると数がはるかに少なく、「此銭匱物最多シ、真正ノモノハ僅カニ三品ニ過ギズ」といわれるほどの稀少品とされている。いずれも銹化が進み外輪が欠損するなど、他の絵銭にはみられぬ出土品特有の特徴が共通する。

以上のように、古泉界に伝わる富本銭には大別して 2 種類あり、前者の富本は円孔、梅鉢文、上藤など江戸時代に盛行した絵銭特有の特徴をそなえており、後者の模鋳と考えられる。したがって、今回の発見例を年代の確実な定点とする限り、奈良時代の「富本」が出土品もしくは伝世品として後世に伝わり、稀少銭の収集熱が高揚した江戸時代に絵銭として模作されるに至ったと推察できよう。絵銭の中に、和同開珎や萬年通寶を模した作品が数多く存在することもそうした推測を裏づける。こうした新旧の富本銭を渾然視する古泉界の中で、唯一「其製

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮報告 VI』1975, P. 101, PL. 101。

2) 小川 浩『日本貨幣図史 10』1965。

3) 赤坂一郎「富本鋳造時代のナゾ」『絵銭』3, 1986。

4) 今井風山軒『風山軒泉話』1889。

図譜類にみえる富本錢

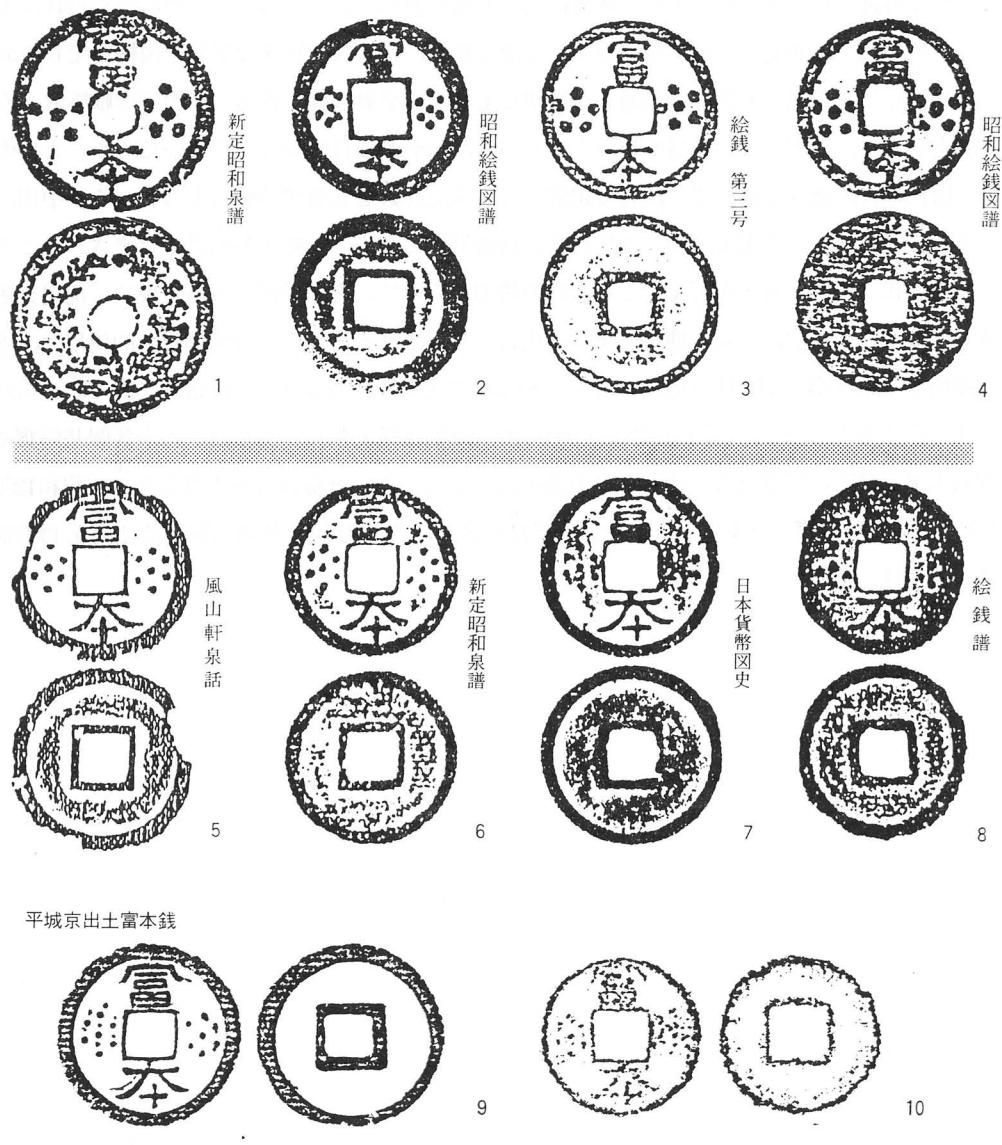


Fig. 92 富本錢各種 (実大)

古朴、和同錢ト無二ノ看アリ、(中略)或ハ富本ノ字義ハ、和同錢司ノ開鑄祝賀ノ錢ナル乎」とした今井風山軒の説は、祝賀錢の当否はともかく卓見といえる。¹⁾

今回の「富本」の発見は、従来の貨幣史研究に一石を投じるものであり、奈良時代に通貨以外の錢が铸造された歴史的背景の解明が今後に残された課題となっている。わが国の貨幣制度

1) 前頁註4) に同じ。

2) 富本の字義については、今の所、その出典、意味を明らかにしがたい。晉の魚襄の『錢神論』を要約した小葉田淳氏は「富がすべての本源であり、貨幣が富の本体であるという所に、錢神論の核心があるように解せられる。」と述べており（小葉田淳「我邦貨幣と厭勝的使用との関係に就いての

考察」『日本貨幣流通史』1943）富本の意味を考える上できわめて示唆的である。また大と十の合字である「本」は、奈良時代には広く本の異体字として使用されているが、元来は十人がけで進むことの早さを表わしており、富本は富の蓄積がはやく進むことを祈願する語句とも考えられる。

導入の模範となった中国には、すでに漢代から厭勝銭（えんしょうせん・ようしょうせん）とよばれる通貨以外の銭が存在する。厭勝銭とは災禍を鎮め、福をもたらすためにつくられたまじない用の銭で、銭文には吉祥句や呪句、靈獸や神仙、星斗など特殊な字句や図柄を配しており、先述したわが国の絵銭と一脈通じた性格をもつ。古泉界には「富本」を中国の厭勝銭とみる説もあるが、中国からの発見がないところから、わが国独自の銭とみてよいだろう。また中国の唐代には、誕生を祝して「洗児金銀銭」という記念銭を私鑄する慣行もみられる。¹⁾ 中国のこうした厭勝銭や「洗児金銀銭」の慣行が、貨幣制度の導入と同時にわが国に将来されたことは、唐文化の模倣・導入を至上とした当時の情勢からみて、充分予測しうる。現に「洗児金銀銭」に類するものは、平安後期から中世の史料に散見される。さらに貨幣の呪術的使用は、本遺跡出土の胞衣壺 SX1400 や地鎮め遺構 SX1535 に代表されるように平城京内に広く認められるところである。また、天平宝字 4 (760) 年に萬年通寶とともに鑄銭された金錢開基勝寶や銀錢太平元寶を、通貨として流通した形跡のないことから、厭勝銭とみる説もあり、昭和12年(1937) に開基勝寶とともに出土した賈行銀錢を含め、奈良時代の貨幣の厭勝的使用を再検討する必要性があろう。

1) 『資治通鑑』唐紀 天宝十載正月条。

2) 『山槐記』『源平盛衰記』治承 2 年 11 月 12 日条の中宮御産事や、『花園院御記』文保 3 年 4 月 21 日条の皇女御出産の記事などに、金錢九十九文の使

用がみえる。

3) 原 三正『錢貨学史序説(八)』『古泉』26, 1974。

4) 末永雅雄他「開基勝寶等出土地」『奈良市史 考古編』1968。